文化的自己観が競技者アイデンティティーに与える影響： 日本・中国の女性競技者の国際比較

萩原 悟一¹⁾ 西田 保²⁾ Gangyan Si³⁾ 磯貝 浩久⁴⁾

Goichi Hagiwara¹, Tamotsu Nishida², Gangyan Si³ and Hirohisa Isogai⁴: Influence of culture on athletic self-identity: A cross-cultural analysis of Japanese and Chinese female athletes. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 59: 549-558, December, 2014

Abstract : The purpose of this study was to examine the relationship between culture and the formation of athletic self-identity in female athletes in Japan and China. The participants were 181 female athletes from Japan (collegiate level 145, high school level 36) and 168 from China (collegiate 97, high school 71), who completed the Scale for Independent and Interdependent Construal of Self and the Athletic Identity Measurement Scale (AIMS). The reliability and validity of both scales were confirmed by Cronbach's alpha and confirmatory factor analysis (CFA), respectively. The results indicated that there were significant differences in athletic identity between Japanese and Chinese female athletes ($t=2.69$, $p<.001$): those in Japan demonstrated higher values of athletic identity than those in China. Multiple regression analysis showed that Japanese female athletes demonstrated only causal relationship of independent cultural self-awareness in predicting athletic identity ($\beta=.19$, $p<.05$) and that Chinese female athletes demonstrated causal relationships of the both cultural self-awareness in predicting athletic identity (independent self: $\beta=.22$, $p<.01$; interdependent self: $\beta=.29$, $p<.001$). The present findings suggest that cultural background has an influence on individual identity, i.e. identity as an athlete in this context.

Key words : cultural self-viewing, athletic identity, sport behavior

キーワード : 文化的自己観, 競技者アイデンティティー, スポーツ行動

1. 緒 言

スポーツ行動に影響する個人の心理的要因の1つとして、競技者アイデンティティーが注目され、スポーツ実施および継続との関連が検討されている (Lamont-Mills and Christensen, 2006). 競技者アイデンティティーについて、Brewer et al. (1993) は「競技者の役割として認知している

自己のこと」として示し、また、中込 (1993) は競技者アイデンティティーを「自分はどういう競技者なのか、どういうスポーツ競技者になりたいかなどの主観的意識や感覚、およびスポーツ経験を通じて得た自己認識やスポーツに関与することで自分を認識していく心理的態勢」と定義している。競技者アイデンティティーはスポーツ競技という特異的な経験から形成される、スポーツ競技者特有のアイデンティティーとして捉えられて

1) 日本経済大学

〒818-0197 福岡県太宰府市五条 3-11-25

2) 名古屋大学

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

3) 香港體育學院

25 Yuen Wo Road Sha Tin, N.T. Hong Kong

4) 九州工業大学

〒820-8502 福岡県飯塚市川津680-4

連絡先 萩原悟一

1. Japan University of Economics

3-11-25 Gojo, Dazaifu-shi, Fukuoka 818-0197

2. Nagoya University

Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601

3. Hong Kong Sports Institute

25 Yuen Wo Road Sha Tin, N.T. Hong Kong

4. Kyushu Institute of Technology

680-4 Kawazu, Iizuka-shi, Fukuoka 820-8502

Corresponding author hagiwara-g@fk.jue.ac.jp

おり（奥田・中込，1993），面接法やインタビューなどの臨床的立場および，尺度法等を用いる特性論的立場から，競技者アイデンティティーについての検討が進められている（Beisser, 1971；中込，1987；高見ほか，1990；中込・奥田，1993；Brewer et al., 1993）。

近年，競技者としての役割がスポーツ実施・継続への基礎となり，役割の認知が高い者ほど，スポーツへの傾倒を示していること（Danish, 1983; Brewer et al., 1993）から，競技者アイデンティティーがスポーツ・コミットメントに影響していることが示されている（Anderson et al., 2009; Horton and Mack, 2000；萩原・磯貝，2013a；Chen et al., 2010）。さらに，競技者アイデンティティーは，スポーツ行動を促進する要因の1つであるとされ，競技者アイデンティティーが強く形成されている者ほど，スポーツを実施・継続していることが明らかにされている（Good et al., 1993; Matheson et al., 1994; Tasiemski et al., 2004; Lamont-Mills and Christensen, 2006）。以上のように，競技者アイデンティティーはスポーツ実施・継続を説明する際，重要な心理的要因の1つとして捉えられている。

アイデンティティー理論の先駆者であるエリクソン（1973）はアイデンティティーを形成していく過程において，特に青年期では，国家や文化などの社会的な文脈の中で，自己の位置を明確にすることにより，人格を形成していくとしている。すなわち，所属する文化や環境によって，個人のアイデンティティー形成の過程は異なることが推察される。青年期のアイデンティティー形成の過程については，多様な視点から検討する必要性が示されており（畑野，2010），他者との関係性などの社会的要因（杉村，2001）や個人の感情や志向性などの個人内の心理的要因（溝上，2008）等の視点から検討が進められている。

また，競技者アイデンティティーの形成要因については，社会的要因の1つであるソーシャルサポートの認知と競技者アイデンティティーの関連性（萩原・磯貝，2013a）や個人の心理的要因である目標志向性が競技者アイデンティティーの

形成に影響していること（Daniels et al., 2005）などが示されている。そして，社会文化的な視点から，競技者アイデンティティーの国際比較研究が実施されている（Visek et al., 2008）。

競技者アイデンティティーのこれまでの国際比較研究では，米国人の競技者は日本人と比べ競技者アイデンティティーを強く形成していること（磯貝ほか，2001），英国とマレーシアでは相違しないこと（Matheson et al., 1994），ロシアと英国，米国ではロシア人の競技者は英国人，米国人と比べ競技者アイデンティティーを強く形成している（Hale et al., 1999）ことなど，国の違いで，その程度に差異があることが明らかにされている。しかしながら，競技者アイデンティティーの程度に国別で差異が生じている理由について，これらの国際比較研究では，明らかにされていない。そのため，競技者アイデンティティーの国別比較のみだけでなく，競技者アイデンティティーを規定する文化的要因を含めた包括的な国際比較研究が必要であろう。

社会心理学者の北山（1994）は個々のアイデンティティーは「個人の所属する文化にある文化的自己観により構成された社会的現実を背景として形成される」としている。すなわち，アイデンティティー形成には文化的自己観が影響していることを示唆している。文化的自己観とは，「ある文化において歴史的に形成され，社会的に共有された自己，あるいは人一般についてのモデル，通念，メタセオリーとしての自己（北山，1997）」と定義され，欧米と日本をはじめとする東洋の文化の相違を説明するための重要な概念として，提唱された。Markus and Kitayama（1991）は文化的自己観を「相互協調的自己観」と「相互独立的自己観」に区別し，米国をはじめとする欧米文化では，自己とは他の人々や周りの事柄とは区別して見なすことで，自己表現や自己目標の達成に向けて動機づけられる相互独立的自己観が優勢であり，日本をはじめとする東洋文化では，周囲との関係性においての自己観は特定の状況や周囲の人々との関係によって，その属性が決定する相互協調的自己観が優勢であるとした。また，高田ほか

(1996)は相互独立・協調的自己観は、欧米文化と東洋文化というような比較文化的な分析視点のみならず、東洋文化や日本文化内での文化内比較に対しても有効な分析手段であることを指摘している。すなわち、同じ東洋文化内においても、文化的自己観に考慮した比較検討を実施することで、差異を明らかにできる可能性が示唆できる。金(2005)は東洋文化という一括りでアジア文化を規定することは極めて包括的であると指摘し、韓国と日本の大学生を対象に、文化的自己観とアイデンティティーの関連性について比較を行った結果、日本の学生は韓国の学生に比べ、相互協調的自己観が、アイデンティティーに強い影響を与えていることを明らかにした。すなわち、同じ東洋文化においても、文化的自己観の相違がアイデンティティー形成に影響していることが示唆され、競技者アイデンティティーにおいても、文化的自己観の影響が想定される。

近年、スポーツ科学分野においても、文化的自己観を考慮した国際比較を実施する必要性が指摘されている。西田ほか(2009)は、スポーツの価値や意味は、個人が所属する文化によって異なることから、心理的プロセスにおける文化の相違を説明するときには文化的自己観を考慮することが重要であることを指摘している。スポーツ行動における文化的自己観を検討した研究では、特にわが国では、他者との協調を重視する相互協調的自己観がスポーツ行動や志向を決定する上で重要な役割を果たすことが指摘されている(磯貝, 2008)。さらに、日本、中国のスポーツ競技者の文化的自己観とスポーツへの動機づけとスポーツ行動を規定する要因の関連性について検討した研究では、同じ相互協調的自己観が優勢なアジア諸国であっても、文化的自己観とスポーツの動機づけへの影響が異なることが明らかにされている(磯貝, 2012)。すなわち、アジア諸国の中でもスポーツへの動機づけに影響を与える文化的自己観は異なることが示唆されている。また、競技者アイデンティティーに関する国際比較を実施した磯貝ほか(2001)は競技者アイデンティティーの国家間の差異を明らかにするためには、単に国

という単位で比較するだけでなく、文化的要因を考慮した競技者アイデンティティー研究の必要性を指摘している。それらを踏まえると、わが国の競技者アイデンティティーの規定要因を明らかにするためには、文化的自己観を考慮した検討が重要であるといえる。

ところで、わが国と諸外国において、顕著にみられる競技スポーツの実施・継続に関する相違点の1つとして、女性のスポーツに関する文化的背景や環境が挙げられる(井谷ほか, 1999)。わが国の女性とスポーツ参加の関連について検討した土肥(1998)は女性のスポーツ参加に対して社会一般の見方は必ずしも好意的なものではなく、スポーツ自体の存在が男性的なものであるという先入観が存在するとしている。また、わが国では、いまだに競技力を支える青年期の競技人口または部活動加入率は男性に比べ、女性の割合が少ないという報告がなされている(笹川スポーツ財団, 2008)。本研究でわが国との比較対象国とした、中国の女性スポーツについては、1980年代の経済改革以降、政府によって女性競技者の管理が行われるエリートスポーツシステムと一般競技者向けのスポーツ参加プログラムであるマススポーツシステムに二分され、特に、エリートスポーツにおいては、学生であっても競技レベルの高い女性競技者に対しては、政府が多大な支援をしていることが報告されている(Xiong, 2011)。また、近年の中国では世界大会やオリンピックでの女性競技者の活躍が急成長を遂げており、それらの活躍が女性のスポーツ参加を促進しているという重要な役割を担っていることが指摘されている(Pan and Liu, 2012)。このように、両国の競技者を取り巻く文化的・社会的背景は異なる様相を呈しており、これらからもたらされる文化的自己観の違いが、競技者アイデンティティーに影響を与えている可能性が推察される。

以上のことから、本研究では、文化的自己観が競技者アイデンティティーに与える影響を検討することおよび、日本と中国の比較から、わが国の女性競技者の競技者アイデンティティー形成に及ぼす文化的自己観の特徴を明らかにすることを目

的とした。

2. 研究方法

2.1 調査対象者

調査対象者は日本（大学生：145名，高校生：36名），中国（大学生：97名，高校生：71名）の女性競技者（体育会所属）の計349名である。なお，日本は関東地区および，九州地区に所在する総合大学（2校）および，高等学校（2校）に所属する女性競技者，中国では，湖北省の首都に位置する武漢市内の総合大学および，高等学校に所属する女性競技者を対象とした。また，国際比較を行う際，調査対象者の個人的属性および，社会的環境を等しくする必要があること（真鍋，1999）から，調査対象者の選択には香港のスポーツ心理学専門家および，日本のスポーツ心理学専門家（3名）で話し合いを行い，日本・中国で調査対象者の属性を概ね均等になるよう配慮を行った。具体的には，中国の競技者は湖北省および，武漢市の代表レベルの者を対象とし，日本は各地区の代表レベルの者（県代表や地区代表）を対象とした。また，本研究では，中国の競技者との社会的環境での等価性を鑑み，学校期別に関わらず，各地区の代表レベルの者を選択し，学生競技者の総数を概ね均等にし，比較を実施した。質問紙法を採用し，各関係機関の責任者に配布，回収を依頼した。調査対象者の平均年齢は19.28歳（ $SD \pm 4.37$ ），競技種目は，陸上（70名），バスケットボール（41名），バレーボール（33名），競泳（20名），ローイング（20名），競技ダンス（18名），テコンドー（16名），競技カヌー（14名），サッカー（13名），テニス（11名），格闘技（10名），柔道（9名），ハンドボール（9名），競技エアロビクス（8名），体操（6名），ソフトボール（6名），剣道（6名），卓球（4名），バドミントン（4名），フェンシング（3名），ラクロス（2名），ライフセイビング（2名），アイススケート，弓道，空手，なぎなた，トライアスロン，チアリーディング（各1名）であった（18名は無回答及び欠損）。

2.2 調査内容

2.2.1 競技者アイデンティティ尺度

競技者アイデンティティの測定はBrewer and Cornelius（2001）によって作成されたAthletic Identity Measurement Scale（AIMS）を邦訳した1因子7項目のAIMS-J（磯貝ほか，2001）を日本で使用し，中国では，Hong Kong Sports Instituteのスポーツ心理学者らによってAIMSを中国語に翻訳したものを使用した。「私は自分のことを競技者だと思う」，「私には，スポーツに関する目標がいくつもある」，「スポーツは，私の生活の中で最も大切なものである」などの項目で構成される。尺度は「全く違う（1）」から「全くその通り（7）」までの7段階評定尺度であり，得点が高いほど，競技者アイデンティティを形成しているとされる（49点満点）。7項目という少ない項目で，競技者アイデンティティの程度を容易にかつ，正確に評価できることから，本尺度を適用した。

2.2.2 文化的自己観尺度

文化的自己観の測定において，高田ほか（1996）によって作成された2因子20項目の相互独立的-相互強調的自己観尺度を日本で使用した。また，中国ではHong Kong Sports Instituteのスポーツ心理学者らによって，中国語に翻訳したものを使用した。「常に自分自身の意見を持つようにしている」，「たいいはい自分一人で物事を決断する」などの相互独立的自己観因子（10項目），「人が自分をどう思っているかを気にする」，「人から好かれることは自分にとって大切である」などの相互協調的自己観因子（10項目）で構成されている。評価は「全くあてはまらない（1）」から「ぴったりあてはまる（7）」の7段階で行い，得点が高いほど，各自己観を有しているとされる（相互独立的自己観：70点満点，相互協調的自己観：70点満点）。本尺度は高田（1992）の改訂版であり，より精選された項目と十分な信頼性・妥当性を有している。また，学生を対象に作られていること，文化内比較だけでなく，比較文化的視点を持って作られた尺度であることから，本研究の目的に沿っていると判断し援用した。

2.3 分析方法

分析方法については、使用した尺度の内的整合性を確認するため、クロンバックの α 係数を算出し、また、構成概念妥当性を確認するため、検証的因子分析をすべての尺度に対して行った。また、 t 検定を使用して、日本、中国の文化的自己観及び、競技者アイデンティティの比較を実施した。文化的自己観が競技者アイデンティティに与える影響を検討するために、国別に重回帰分析を実施した。統計解析パッケージはIBM SPSS Statistics20.0 および AMOS20.0 を使用した。

2.4 倫理的配慮

調査用紙配布前に、本研究の意図を説明し、調査内容については統計的处理により、個人を特定できない状態にすることを口頭および書面にて説明し、承諾できる場合のみ調査を実施した。

3. 結 果

3.1 尺度の信頼性・妥当性の検討

異文化間での対応性を確定する場合、尺度の等価性を確認することが重要であることが指摘されている(磯貝, 1996)。また、スポーツに関する比較研究のために、比較すべき国家間において、尺度の一定の共通性をもつこと、すなわち、尺度の構成や基準が機能的に等価であることを前提として、国際比較研究する必要性が指摘されている(多々納, 1988)。そこで、本研究では文化間で異なる事象そのものよりも、それが文化の中で果たしている機能に注目するため、採用した尺度に対して、検証的因子分析を実施し、尺度の構成概念妥当性を検討した。また、クロンバックの α 係数で尺度の内的整合性を確認することとした。

使用したそれぞれの尺度の構成概念妥当性を検討するため、検証的因子分析を行った。適合度指標は Goodness of Fit Index (GFI), Adjusted Goodness of Fit Index (AGFI), Comparative Fit Index (CFI), Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) を使用した。GFI, AGFI,

CFI はモデルが適合するためには、1 に値が近いほどモデルの説明力があるとされ、一般的に0.9以上が当てはまりの良いモデルの判断基準とされている(小塩, 2009)。また、RMSEA は0に近いほど良いとされ、0.08以下であればモデルの適合が好ましく、0.10以上で当てはまりが悪いとされる(山本・小野寺, 1999)。検証的因子分析の結果、文化的自己観尺度では、日本語版(GFI = .944, AGFI = .901, CFI = .907, RMSEA = .064)、中国語版(GFI = .941, AGFI = .904, CFI = 1.00, RMSEA = .000)で概ね良好な値を示した。また、競技者アイデンティティ尺度では、日本語版(GFI = .974, AGFI = .944, CFI = .960, RMSEA = .077)、中国語版(GFI = .984, AGFI = .950, CFI = .997, RMSEA = .031)で概ね良好な値を示し、すべての尺度で良好な適合度を得ることができ、構成概念妥当性が示された。尺度の内的整合性を検討するため、各因子のクロンバックの α 係数を算出した。その結果、日本版の文化的自己観尺度の α 係数は、相互協調的自己観因子が.80、相互独立的自己観因子は.77となった。また、中国版では相互協調的自己観因子が.68、相互独立的自己観因子は.74であった。因子の信頼性係数は概ね良好な値を示し、尺度の内的整合性が確認された。また、競技者アイデンティティ尺度の検討を行った結果、日本版の α 係数は.80、中国版.86となり尺度の内的整合性が確認された。以上のことから、本研究で使用したすべての尺度の信頼性、妥当性が確認された。

3.2 日本・中国女性競技者の差の検討

まず、日本、中国のそれぞれの国別に文化的自己観の文化内比較を実施するため t 検定を行った結果、日本、中国ともに、相互協調的自己観(日本: $M = 48.30$, $SD = 7.68$; 中国: $M = 49.60$, $SD = 6.91$)が相互独立的自己観(日本: $M = 43.93$, $SD = 7.15$; 中国: $M = 45.23$, $SD = 7.73$)に比べ、有意に高いことを示した(日本: $t = 5.17$, $p < .001$; 中国: $t = 6.89$, $p < .001$) (図1)。次に、日本、中国の女性競技者の文化的自己観及び、競技者アイデンティティの文化間比較を実施する

図1 文化的自己観

図2 競技者アイデンティティ

ため、t検定を行った結果、文化的自己観には有意差が認められなかった（相互独立： $t=1.63$, n.s., 相互協調： $t=1.67$, n.s.）（図1）が、競技者アイデンティティには有意差が認められた（ $t=2.69$, $p<.001$ ）（図2）。日本の女性競技者（ $M=37.54$, $SD=6.86$ ）は中国の競技者（ $M=35.17$, $SD=9.31$ ）に比べ、有意に高い得点を示していた。

3.3 文化的自己観と競技者アイデンティティの関係の検討

文化的自己観が競技者アイデンティティに与える影響を検討するために、国別に重回帰分析を実施した。結果を表1に示す。

日本の女性競技者では、相互独立的自己観から競技者アイデンティティへの標準偏回帰係数（ β ）が有意である一方で、相互協調的自己観から競技者アイデンティティへの標準偏回帰係数は有意ではなかった。中国の女性競技者は、相互独立及び、相互協調的自己観から競技者アイデンティティへの標準偏回帰係数が有意であった。

表1 日中女性競技者の重回帰分析結果

	日 本		中 国	
	β	R^2	β	R^2
相互独立	.19*		.22**	
相互協調	.09	.04*	.29***	.18***

従属変数：競技者アイデンティティ

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

4. 考 察

本研究の目的は、文化的自己観が競技者アイデンティティに与える影響を検討することであった。また、日本、中国の比較から、わが国の女性競技者の競技者アイデンティティ形成に関する特徴を明らかにすることを目的としていた。

日本、中国のそれぞれの国別に文化的自己観の文化内比較を実施した結果、日本、中国ともに、相互協調的自己観が相互独立的自己観に比べ、有意に高いことを示した。また、日本、中国の女性競技者の文化的自己観及び、競技者アイデンティティを比較した結果、文化的自己観には有意差が認められなかったが、競技者アイデンティティには2国間で有意差が認められた。日本の女性競技者は中国の競技者に比べ、有意に高い得点を示していた。

以上の結果から、Markus and Kitayama (1991) によって示された結果、すなわち、米国をはじめとする欧米文化では、自己と他者を区別して志向する相互独立的自己観が優勢であり、日本をはじめとする東洋文化では、自己に他者との関係を取り込んで志向する相互協調的自己観が優勢であるという説を概ね支持するものとなった。また、同じアジア文化内である日本と中国では、文化的自己観の程度には相違がないということが示されたことから、日本や中国の女性競技者の文化的自己観は他者との人間関係の中での自己を見出すとされている相互協調的自己観が優勢であり、同じような志向を有していることが示唆される。

競技者アイデンティティについては、日本・

中国の女性競技者ともに、わが国で学生競技者（ $n=1053$ ）を対象に行われた先行研究（萩原・磯貝，2013b）で示されていた数値（地区代表大会出場レベル： $M=36.06$ ）と概ね同等の値を示していた。また、競技レベルの高い女性と男性競技者では、差異がないこと（磯貝ほか，2001）から、本研究で対象とした競技者はわが国における地区代表レベルの競技者と同等のレベルに位置する者であると考えられる。そして、日本は中国に比べ有意に高いという結果が示された。すなわち、日本人女性競技者は中国の女性競技者に比べ、競技者としての役割に対するアイデンティティをより強く形成していることが考えられる。一方、本研究で対象とした女性競技者は概ね同じレベルにある競技者を選択したが、中国の場合、国家代表レベル（日本でいう日本代表レベル）の競技者は北京へ召集されるが、その他の選手は国家代表レベルになるまでは、地区の代表レベルとして扱われるため（国家レベルと地区代表レベルでは大きな差がある）、選手によっては、国家代表レベル以外にある自身の競技者アイデンティティを低く認知している可能性も考えられる。本研究では、国際比較研究という立場から、調査対象者の等価性に考慮しながら対象者の選択を行ったが、今後の日中比較においては、各国代表レベルの者のみに対象者を絞るなどして検討する必要があると考えられる。

本研究では、競技者アイデンティティ形成の程度を、文化的な相違を測定する文化的自己観の影響から検討するため、文化的自己観と競技者アイデンティティの関連について重回帰分析を実施した。その結果、日本の女性競技者では、相互独立的自己観から競技者アイデンティティへのパスが有意である一方で、相互協調的自己観から競技者アイデンティティへのパスは有意ではなかった。中国の女性競技者は、相互独立及び、相互協調的自己観から競技者アイデンティティへのパスが有意であった。

以上の結果から、わが国の女性競技者の特徴は、個人は自立した存在として認識し、スポーツにおいては自分独自の目標や規範などを見出して

行動する相互独立的自己が競技者アイデンティティと結びついていることが明らかとなり、中国の女性競技者は2つの文化的自己観が競技者アイデンティティに影響していることが明らかになった。

わが国の女性競技者は、日本人特有とされる相互協調的自己観とは逆の自己観、すなわち、周りの環境や影響によって左右されることなく、個人の意思でスポーツ競技者としての自己を見出していることが示唆された。佐藤・糸野・丸山（2000）は女性のスポーツ参加に関して事例を基に検討した結果、わが国の女性競技者は、コーチや監督などの指導者の指示に依存的になりすぎることから、スポーツ競技者としてのアイデンティティを形成できないでいることが多くあると指摘している。他者である指導者との関係性を重視する相互協調的自己観は、競技者としてのアイデンティティ形成に繋がらないということを本研究によって、定量的に示すことができたと考えられる。すなわち、わが国において、「人が自分をどう思っているのかを気にする」、「仲間の中での輪を維持することが大切である」などの相互協調的自己観が優勢な場合、競技者としてのアイデンティティを形成することが難しいのではないかと考えられる。また、わが国の女性競技者の場合は、「自分が何をしたいのかを常に分かっている」ことや「自分の意見をいつもはっきり言う」ことなどを心がけることで、より自立した存在として自己を認識し、競技者としての同一性を高め、より深く、スポーツに関わっている可能性が考えられる。すなわち、女性競技者として競技スポーツを実施する際、周りの人や社会の中で自己を形成するとした女性特有の相互協調的自己観（木内，1995）を強く持つことは、競技者として活躍するためのアイデンティティ形成の弊害となる可能性が考えられる。

中国の女性競技者はわが国とは異なり、相互協調的自己観および、相互独立的自己観の両方が、競技者アイデンティティに影響していることを示した。相互協調的自己観が相互独立的自己観よりも高く、わが国と同じような傾向にあるが、他

者への依存関係を強く持っていたとしても、自身の競技者アイデンティティ形成への弊害とはならず、他者の期待を取りこみながら競技者アイデンティティを形成していると考えられ、また、同時に、「常に自分自身の意見を持つようにする」、「いつも自信をもって発言し、行動する」などの相互独立的自己観を持つことが競技者としてのアイデンティティを見出している可能性が考えられる。このことは、相互協調的自己観が優勢であるとされる東洋文化 (Markus and Kitayama, 1991) の中でも、個人の中には相互独立的自己観と相互協調的自己観が混在し、どちらかの優勢な自己観により、個人の心情や行動が決定されたとした木内 (1995) の見解を支持する結果であったと考えられる。すなわち、同じような文化的自己観を有している文化であっても、アイデンティティ形成に関しては、その影響に相違が生じる可能性が示されたと考えられる。

本研究では、文化的自己観を用いることによって、競技者アイデンティティ形成を説明し、磯貝ほか (2001) が指摘していた文化と競技者アイデンティティに関して、理論的枠組みを用いながら検討を行った。しかしながら、本研究の結果のみで、わが国の女性競技者に関する文化と競技者アイデンティティの関連を明確に説明することは難しく、今後は、サンプル数を大幅に増やすことや男性競技者を含めた比較、そして、研究データの蓄積も含めて、さらなる検討を実施し、文化的自己観と競技者アイデンティティの関連を明らかにしていく必要があるであろう。また、文化的自己観と競技者アイデンティティについて、有意な関連性を示したが、その係数は全体的に低いように見受けられる。アイデンティティの規定要因は社会的要因、心理的要因、そして、文化的要因など様々であることから、競技者アイデンティティもまた文化的要因だけでは規定されない可能性が考えられる。今後は、様々な要因を含めた包括的な検討が必要であろう。

最後に、日本人競技者の心情や行動を客観的に明らかにするためには、国際比較といった相対的な比較が必要であるが、その際に文化的要因を考

慮した視点が必要であると思われる。今後もこのような視点を含めた国際比較研究が期待される。

5. 結 論

本研究では、文化的自己観が競技者アイデンティティに影響を与えていることを明らかにした。また、日本、中国の比較から、わが国の女性競技者の競技者アイデンティティ形成に関する特徴が示唆された。中国の女性競技者は相互独立的自己観および、相互協調的自己観の両方が、競技者アイデンティティ形成に影響をしていることが示唆され、わが国の女性競技者は相互独立的自己観のみが競技者アイデンティティに影響していることが示された。スポーツの文化的背景や個人の心情や行動が、競技者アイデンティティ形成に影響している可能性が示されたことから、今後、文化や国による競技者アイデンティティの差異を検討する際、有用な情報となりうるであろう。

文 献

- Anderson, C.B., Masse, L.C., Zhang, H., Coleman, K.J., and Chang, S. (2009) Contribution of athletic identity to child and adolescent physical activity. *American Journal of Preventive Medicine*, 37(3): 220-226.
- Beisser, A.R. (1971) Identity formation within groups. *Journal of Humanistic Psychology*, 11: 133-145.
- Brewer, B.W. and Cornelius, A.E. (2001) Norms and factorial invariance of the athletic identity measurement scale. *Academic Athletic Journal*, 16: 103-113.
- Brewer, B.W., VanRaalee, J.L., and Linder, D.E. (1993) Athletic identity: Hercules' muscle or Achilles heel?. *International Journal of Sport Psychology*, 24(2): 237-254.
- Chen, S., Snyder, S., and Magner, M. (2010) The effects of sport participation on student-athletes' and non-athlete students' social life and identity. *Journal of Issues in Intercollegiate Athletics*, 3: 176-193.
- Daniels, E., Sincharoen, S., and Leaper, C. (2005) The relation between sport orientations and athletic identity among adolescent girl and boy athletes. *Journal of Sport Behavior*, 28(4): 315-332.
- Danish, S.J. (1983) Musing about personal competence:

- The contributions of sport, health, and fitness. *American Journal of Community Psychology*, 11: 221-240.
- 土肥伊都子 (1998) ジェンダーと健康スポーツ. 竹中晃二編著, 健康スポーツの心理学. 大修館書店: 東京, pp. 158-164.
- エリクソン: 岩瀬庸理訳 (1973) アイデンティティ: 青年と危機. 金沢文庫: 東京. <Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. Norton: New York, USA.>
- Good, A.J., Brewer, B.W., Van Raalte, J.L., and Mahar, M.T. (1993) Identity foreclosure, athletic identity, and college sport participation. *Academic Athletic Journal*, 8: 1-12.
- 萩原悟一・磯貝浩久 (2013a) スポーツ・コミットメントの形成に関する競技者アイデンティティとソーシャルサポートの検討. *スポーツ産業学研究*, 23(2): 227-239.
- 萩原悟一・磯貝浩久 (2013b) 競技者アイデンティティに関する検討—日本語版尺度の再検討および競技レベル, 高校生・大学生競技者の比較—. *運動とスポーツの科学*, 19(1): 45-51.
- Hale, B.D., James, B., and Stambulova, N. (1999) A cross cultural analysis of the dimensions of the athletic identity measurement scale: A herculean undertaking. *International Journal of Sport Psychology*, 30: 83-100.
- 畑野 快 (2010) アイデンティティ形成プロセスの一考察—自己決定を指標として—. *大阪教育大学発達人間学論叢*, 13(1): 31-38.
- Horton, R.S., and Mack, D.E. (2000) Athletic identity in marathon runners: Functional focus or dysfunctional commitment?. *Journal of Sport Behavior*, 23(2): 101-119.
- 磯貝浩久 (1996) スポーツ心理学における異文化間研究の動向と課題. 九州工業大学情報工学部紀要, 9: 123-134.
- 磯貝浩久 (2008) 「他者志向的動機」「関係性と動機づけ」「自律性」. スポーツ心理学会編, スポーツ心理学事典. 大修館書店: 東京, pp. 281-285.
- 磯貝浩久 (2012) スポーツ動機づけに及ぼす文化的自己観の影響—日本, 中国, 台湾の大学生競技者の比較—. *九州体育・スポーツ学研究*, 27(1): p. 71.
- 磯貝浩久・Brewer, B.W.・Cornelius, A.E.・Etnier, J.・徳永幹雄 (2001) 競技者アイデンティティに関する研究—評価尺度の作成と性, 文化, 競技レベル, 動機づけとの関係—. 財団法人ミズノスポーツ振興会2001年度研究助成金研究成果報告書.
- 井谷恵子・松岡智子・松岡宏高 (1999) アメリカの体育・スポーツにおけるジェンダーエクイティの進展—NAGWSによるジェンダーエクイティ手引書を中心に—. *京都教育大学紀要*, 95: 1-14.
- 金 美伶 (2005) 韓国と日本の大学生における対人不安と同一性, 公的自己意識, 相互依存的自己との関係. *パーソナリティ研究*, 14(1): 42-53.
- 北山 忍 (1994) 文化的自己観と心理プロセス. *社会心理学研究*, 10: 153-167.
- 北山 忍 (1997) 文化心理学とは何か. 柏木恵子・東洋・北山忍編著, 文化心理学—理論と実証—. 東京大学出版会: 東京, p. 25.
- 木内亜紀 (1995) 独立的自己・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 66: 100-106.
- Lamont-Mills, A. and Cristensen, S.A. (2006) Athletic identity and its relationship to sport participation levels. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 9: 472-478.
- 真鍋一史 (1999) 質問紙法にもとづく国際比較調査の現状と課題. *国際協力論集*, 7(2): 67-81.
- Markus, H.R. and Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98: 224-253.
- Matheson, H., Brewer, B.W., VanRaalte, J.L., and Andersen, M.B. (1994) Athletic identity of national level badminton players: A cross-cultural analysis. In: Reilly, T.M., Hughes, M., and Lees, A. (Eds.) *Science and racket sports*. E&FN Spon: London, pp. 228-231.
- 溝上慎一 (2008) 自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる—. 世界思想社: 京都.
- 中込四郎 (1987) 運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験 (V) —ある運動選手の生育史における危機的場面—. *筑波大学体育科学系紀要*, 10: 43-51.
- 中込四郎 (1993) 危機と人格形成—スポーツ競技者の同一性形成—. 道和書院: 東京.
- 中込四郎・奥田愛子 (1993) スポーツ場面の危機様態と自我同一性形成における対処行動パターンの類似性. *体育学研究*, 38: 175-185.
- 西田 保・磯貝浩久・北村勝朗・杉山佳生・伊藤豊彦 (2009) スポーツ動機づけの異文化間研究に向けて. *総合保健体育科学*, 32(1): 31-40.
- 奥田愛子・中込四郎 (1993) スポーツマン的アイデンティティの志向性と職業決定行動との関係. *体育学研究*, 37: 393-404.
- 小塩真司 (2009) はじめての共分散構造分析—Amosによるパス解析 (第2版). 東京図書: 東京, pp.

- 110-111.
- Pan, H. and Liu, X. (2012) Review on Chinese women athletes' involvement in the Olympic games. *Education management, Education Theory and Education Application Advances in Intelligent and Soft Computing*, 109: 101-106.
- 笹川スポーツ財団 (2008) スポーツ白書—スポーツの新たな価値の発見—. SSF 笹川スポーツ財団: 東京, p. 204.
- 佐藤志穂・桑野 豊・丸山富雄 (2000) スポーツ参与における性差の社会学的研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, 1: 13-22.
- 杉村和美 (2001) 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2 年間の変化とその要因. 発達心理学研究, 12(2): 87-98.
- 多々納秀雄 (1988) スポーツ活動の実態と価値意識に関する国際比較研究(1): 「日本のスポーツ」論の認識論的・方法論的諸課題. 健康科学, 10: 91-101.
- 高見和至・岸 順治・中込四郎 (1990) 青年期のスポーツ経験と自我同一性形成の諸相. 体育学研究, 35: 29-39.
- 高田利武 (1992) 独立的・依存的自己と自尊感情および社会的比較. 日本グループ・ダイナミクス学会第42回大会発表論文集, 142-143.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996) 相互独立的—相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成. 奈良大学紀要, 24: 157-173.
- Tasiemski, T., Kennedy, P., Gardner, B.P., and Blakley, R.A. (2004) Athletic identity and sport participation in people with spinal cord injury. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 21: 364-378.
- Visek, A.J., Hurst, J.R., Maxwell, J.P., and Watson, J.C. (2008) A cross-cultural psychometric evaluation of the athletic identity measurement scale. *Journal of Applied Sport Psychology*, 20(4): 473-480.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (1999) Amos による共分散構造分析と解析事例 (第 2 版). ナカニシヤ出版: 京都, p. 17.
- Xiong, H. (2011) Stratification of women's sport in contemporary China. *The International Journal of the History of Sport*, 28(7): 990-1015.

(平成25年10月4日受付)
(平成26年7月15日受理)

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2014/9/8